

患者が変われば 医療が変わる 医療が変われば 地域が変わる



島根益田がんケアサロン 代表
C・T・V創生研究所 所長 納賀 良一

1937年5月、石川県金沢市生まれ。同志社大学文学部卒。特殊精密機器メーカーの(株)フジキン総務部部長兼改革推進室リーダーを経て、1994年3月、1ターンで益田市移住。益田ドライブイングスクール合宿型システム作りを依頼される(カイアの夜明けで放映)。その後、C・T・V創生研究所設立。地域で観光、定住、教育、医療など街おこしを実施。2005年12月、全国初のがんサロン開設。

第38回 「がん政策サミット」から見えてきたもの

2017年5月、東京浅草橋で開催された第14回がん政策サミットに参加してきた。毎年2回開催される。2泊3日のスケジュールでもあるからだろうか。テーブルがほし

死にきちんと向き合って

い。椅子だけだと以外に疲れるからだ。参加者はがん患者だけではなく県行政、県議会議員、医療関係者と多職種が集まり、34都道府県から120名ほどの参加だった。

後半のワークショップが楽しかった。他県の職種の方々とグループワークが出来る事なんて滅多にないからだ。

今回最終日に「現場から見た在宅医療の制度」についてビデオメッセージがあった。診療報酬、介護報酬制度の話が中心だったが、最後の議題が死についてだった。

私自身2年前から終末期医療のテーマに取り組んできたのでなじみが深い。その中で印象的

なことが報告された。ひとつ目は「死に向き合う」ということ。死は他人事。大抵のみなさんは、死は自分には関係ないことと思っている。そしていざという時に大慌てをしている。

2つ目は「看取りの文化を変える」ということ。独居老人が多くなってきた昨今、自分の死をどのように考えているのだろうか。生きている者に死は100パーセントやってくる。それなのに他人事とはどうしてだろうか。

私自身、死をどのようにして迎えたらいいか当然考えている。数年前、妻を見送ってから考えるようになったのかも。最

後は一人でもいい。看取られなくてもいいと思っ

ていた。そのためには元

気な内から準備が必要

だ。家族に何をしてほしいかを、はっきりと伝えておくことが肝心だ。切り出しにくいテーマではあるが必要なことだ。

先日ある医療者向けサイトにがん患者として自分の死の方について意見を述べた事があったが、医療者の皆さん方の反応は薄かった。確かに難しく、話にくいテーマではあるが、つらい真実こそ正直に伝えるべき。医療者がこのテーマを避けるようでは、患者に対し真のインフォームド・コンセントは出来ないことを感じてほしい。